専修人文論集 103号
（2018）001-024

曲亭馬琴の短編合巻（十五）『代夜待白女辻占』（上冊）

板坂則子
専修大学文学部教授

本稿は、曲亭馬琴の短編合巻を時代を追って翻刻・紹介していく目的で『専修国文』（専修大学日本語日本文学文化学会）に連載した「曲亭馬琴の短編合巻」の後を継ぐものである。版型の違いから組み方等、若干の変化はあるが、内容・方針ともに前者を引き継いでいる。

ただし、前回の十四回までが馬琴の短編合巻の初期作品を年代順に紹介してきたのに対して、本稿で取り上げる『代夜待白女辻占』は、既に長編合巻が主流となっている天保元年（文政十三年）に出されており、馬琴の短編合巻最後の作である。さらに構成、出典、文章すべての面に於いて、同時期の馬琴の他の合巻類には類を見ない、異色作といえる内容を持つ。本作をここで取り上げたのは、馬琴唯一の春本作品である『会本多歌羅久良』（喜多川歌麿画、耕書堂蔦屋重三郎板、寛政十二年刊）の上巻附文「人を祈らば穴二ツと。密夫出入に。狐のかへ玉」と同じ趣向が用いられている故である。

本作は、この時期の馬琴の短編合巻の常として、登場人物に役者似顔絵を使用している。又、作中でそのことが

話題にも上ることから、使用役者の一覧を載せておく。

邯田屋盧五郎……三代　尾上菊五郎
玉枕姫……五代　岩井半四郎
粟飯姫……二代　岩井粂三郎
歌種三位覚高卿……三代　坂東三津五郎
栄華屋夢助……（故）二代　助高屋高助か？
根手松屋果報次……嵐　冠十郎
鄲田屋生作……七代　市川団十郎
白川……岩井紫若
夜船、あるいは魔之吉……五代　瀬川菊之丞
代夜待辻占白女……五代　岩井半四郎

本稿の掲載は頁数の関係から上、中、下冊の三回に分け、今回は凡例ならびに書誌と上冊翻刻を掲載し、解説は後回に掲げることとする。

凡　例

一、本文翻刻は、丁付けにより［一ウ―二オ］のように冠し、丁移りは　」で示す。ただし、書き入れについては丁付けにこだわらず、

意味の通りやすいように並べた。

一、各丁見開きを一面として、丁付けにより［一ウ―二オ］のように示し、その部分の翻刻の近くに画像を掲載した。

一、翻刻については、次の方針によった。

○　読み易くするために句読点を補い、語句を適宜、漢字に置き換えた。その場合、もとの仮名を振り仮名に移して、原型が辿れるように配慮した。

○　原文に本来付いていた振り仮名は、右と区別するために（　）内にいれ、衍字は〈　〉にいれて示した。原文に明らかな誤りが見られる場合は原文通りに翻刻して（ママ）と振った。ただし、序文等、おおむね振り仮名つきの部分は、その旨を丁付けの後に記して、原文通りに翻刻した。

○　書き入れは本文のあとへ一段下げて、文意の通り易い順に翻刻した。

○　字体はできる限りそのまま翻刻したが、漢字仮名とも、旧字・異体・略体字は現行のものに改めた。

一、江戸期の草双紙中には人権に関わる用語が使用されているものもあるが、史料的な性格を考えて原本通りに用いた。人権問題の正しい理解の上に立って活用くださるようお願いしたい。

代夜待白女辻占

書　誌

底本　専修大学図書館向井信夫文庫蔵本

刊年　文政十三年（天保元年）

表紙

作者　曲亭馬琴

画師　歌川国貞

板元　永寿堂西村屋与八

形　中本。一七、八糎×一二、〇糎

匡郭　約一五、八糎×一〇、三糎

上編二巻十丁、中編二巻十丁、下編二巻十丁、合一綴

表紙　錦絵摺付表紙

三冊共に右半分は黒地、左半分は白地に、蝶が飛ぶ意匠で、上冊には玉枕姫（五代　瀬川菊之丞）、中冊は白川（岩井紫若）、下冊は粟飯姫（二代　岩井粂三郎）と、三人の女性登場人物が役者似顔絵で描かれている

「曲亭馬琴著／歌川国貞画」（上冊）

「代夜待」「江戸馬喰町二丁目西村屋与八板」（中冊）

「白女辻占」「文政庚寅孟春発販」（下冊）

裏表紙　三冊共に黒（墨）無地

見返し　上中下冊すべて白地に墨摺。薄墨、艶墨入

記載内容は各冊毎に記す

巻末見返し

［上冊見返し一一オ］

（上冊）『手紙之文言後集』の宣伝文（記載は省略）

（中冊）「文政十三年庚寅春新板袋入標目」（個々の記載は省略）

（下冊）「文政十三年庚寅新彫絵草帋目録」（個々の記載は省略）

柱刻　「代夜待　一（～三十）」

旧蔵印　「小自在庵」（向井信夫）

なお、翻字に当たって底本のかすれや擦れで判読しにくい箇所については、国文学研究資料館にて画像公開されている九州大学文学部所蔵本を用いて校閲を行った。

翻刻『代夜待白女辻占』

［上冊見返し］

代夜待白女辻占上冊

曲亭馬琴著　全本六巻合巻三冊

戯謔すれども虐することなき勧善懲悪の捷径

鑿空すれども有に似たり今昔无比の怪譚

歌川国貞画　書林西村永寿堂梓

［一ウ―二オ］

［一オ］（振り仮名・句読点等は原文のまま）

人に八字の生来あり。命に八位の東西あり。その吉凶に儘すれば。分を量るに足ざることなく。貧富の際に惑ずして。彼天命を楽むを。名つけて知命の達者といふ。衆人多くはこれを知らず。命吉なるは愚福にして。耋寿なるのみ。その甲斐なく。命凶なるも。夢始酔終。役々として煩悩たえず。いにしへの人これを暁すに。人の一期を夢に譬し。枕中記に一篇あり。又槐安の一紀事ありて。窮達栄枯得失の。理を説ことの精妙なれども。読ぬどちには蝴蝶も華胥も。迂遠しと一足飛に。推くだしたる這冊子は。正月二日の初夢にも。大晦日に仮寝の。久松などが夢にだも。見せぬ作為の魂胆を。邯鄲にせし悟道の捷径。などゝは野暮な筋夢中。趣向は婆娑羅。婆底演。わろい夢をば啖といふ。御託をはく沢。獏枕。到底大笑ひ。宝船ではなけれども。春の睡の目覚しに。今茲もかはらず戯れて序す。

文政十三年庚寅春正月吉日新版　曲亭馬琴識　㊞

［ニウ―三オ］

［一ウ―二オ］（振り仮名・句読点等は原文のまま）
千世といふ春の夕くれ来て見れば　入相のかねに花媳
ぞ咲く印印
代夜待　辻占白女
媒妁　栄（ママ）華屋夢助
新婦　玉枕姫

［二ウ―三オ］（振り仮名・句読点等は原文のまま）
夜もあけ婆漠に食なんわがおもふ　伕に別れて歎きせ
し夢印印
費長山の　粟飯姫
邯田屋　盧五郎
国暗国の国暗女

［三ウ―四オ］（振り仮名・句読点等は原文のまま）
くり返す外にさかなはなま酔の　あとをつけたる三輪
の小うたひ印印

［三ウ―四オ］

歌種三位覚高卿
媒酌　根手松屋果報次
引越女房　白川

［四ウ―五オ］（口絵に付く振り仮名・句読点等は原文のまま。「ものかたりのほつたん」部分は凡例を参照）

こきまぜて咲くをとこべしをみなべし　にほひはひとつふたなりの花㊞㊞

美女　夜船
鄲田屋　生作
半月　幻魔之吉

物語の発端

いづれの御時にかありけん。むかしむかし甲斐の国夢山のかたほとりに、邯田屋盧五郎、鄲田屋生作といふ二人の若人ありけり。おなじ山里に生まれしより、すまひも間近かりけるに、そのこゝろざし同じくて好むところも相似たれは、いとけなきより友として早としごろになるまゝに、同胞にも異ならで世にむつまし

［四ウ―五オ］

く交はりけり。かゝりし程に盧五郎はその年すでに廿五才、生作はひとつ劣りて廿四になりけるころ、両人ンひそかに談合するやう、かく山里にて世を渡らは、いかばかりに稼ぐともしいだしたることもなく、五両十両の金だにも手にさへ取らで、このまゝに老いて死なんは口惜しかるべし。いざや都に赴むきて、縁を求め商ひして共稼ぎに稼ぐべし。さればとて、これらの由を親に告げなば止められん。しばらく跡をくらまして、互ひに運を試して見ん。さはとて、やがてつぎへ

［五ウ］

つゞきしのび〳〵に旅よそほひを整のへて、ちとの路銀を腰にしつ、両人ンひとしく宿所をたちいでて、ひそかに都へおもむきけり。

○かくて盧五郎、生作は追手のかゝらんことをおそれて、しきりに道をいそぎつゝ、およそ十日ばかりにして京へ到着してければ、商人宿に足をとゞめ、さて何をもて世わたりのたつきにせんとて談合するに、路

［五ウ―六オ］

銀は元より乏しきに、大かたならず道中にて使ひ減らせしことなれば、今さらに多くはあらぬを、なほうか〳〵と日を送らば、身体こゝに極まるべし。さればとて此まゝにて故郷へは帰りかたし。都は繁華の福地なれば、銭金なども折をりは道に落ちたることもあるべし。拾ふて元手にするより他に心あては絶えてなし。いざ立いでて見ばやとて、両人ゝひとしくあちこちと都のちまたを経巡るほどに、ある日、一条戻橋のほとりにて盧五郎、生作もろ共に小判壱両つゝ拾ひしに、いく程もなくその先に又壱両落ちてありしを、両人ゝひとしく見いだして、たがひに等しく手を掛けて、引はりながら取り上げたり。おほく得かたきさいはひなれば、盧五郎も生作もしきりに胸のうち騒ぐまでよろこび大かたならざれば、旅宿へ帰る道すがら、さらにひそかに談合するやう、拾ひし金を二つに分けては壱両弐分にて元手にたらず。しよせんこの三両をひとつにあはせて、元手にして見世ひとつにて共に稼がば、それほどの利はあるべき也。さればとて商ひは

何をはじめて良からんか。思ひついたることもなし。こゝらに白女といふ巫女ありて、世の人の吉凶をよく占なふと噂にきけば、今よりかしこへ訪ねゆきて、これらのよしを占なはせん。いざとくとくともろともに元来し道へ戻り橋、世わたり急ぐ辻占の白女が宿所へおもむきけり。

ろへそりや又そこに落ちてある。それで三両貸しても利がつく。これは夢かや現かや。べちやアねへ、野郎の梅が枝といふみえだせ。

せいへどつこい見つけた、お互ひ〳〵。

［六オ］

二

その頃、都に白女といへる女巫あり。いづれの里の人なることを知らず。あるひはいふ、その齢は三百余才におよぶとぞ。しかれども見るところは三十ばかりの女子のごとし。この仙女、両部の神道を修行して、ある時は人の為に代垢離をとりて禍ひをはらひ、又ある時は吉凶を占なふてのち〳〵のことを示すに、当たらずといふことなければ、世の人かれをあだ名して代夜まちの白女とも、又辻占の白女ともいひけり。これによりその住まひする巷のあざ名を白女の辻と呼びなすものから、あけくれ人に問はるゝがうるさしとのみ呟きて、おほくは人の求めに応ぜず、やゝもすれば庵をいでて帰らざる日のおほかれど、人そのゆくへを知る者なし。その庵にをらぬころ、あるひは葛城、三熊野にて見かくる者、ありしかば、いよ〳〵仙女なるべしとて、たふとまぬ者なかりけり。さるほどに盧五郎、生作の両人ンはちかころ噂に聞およびし白女が宿所に尋ねゆきしに、折よく庵にありしかば、両人ンひとしく喜びて、にじりあがりつしか〳〵と甲斐の国より来つる由、心ン願のことのおもむき、金三両を拾

［六ウ―七オ］

ひし事、さて何をもて商ひせば繁昌すべきや否やの吉凶、かつその見世を出さんには洛中洛外、いずれのところか良しといふ方角まで占なふて給はれといふに、白女はうなつきて、そはこゝろ得てはべれども、只今にはかに用事ありて近きところへゆかねばならず。見給ふごとく身ひとつにて留守する者もはべらねは、しばらくこゝに待ち給へ。もし退屈に耐へずもあらば、枕もこゝにはべる也。共に寝まりて語らひ給へ、ほどなく

つぎへ

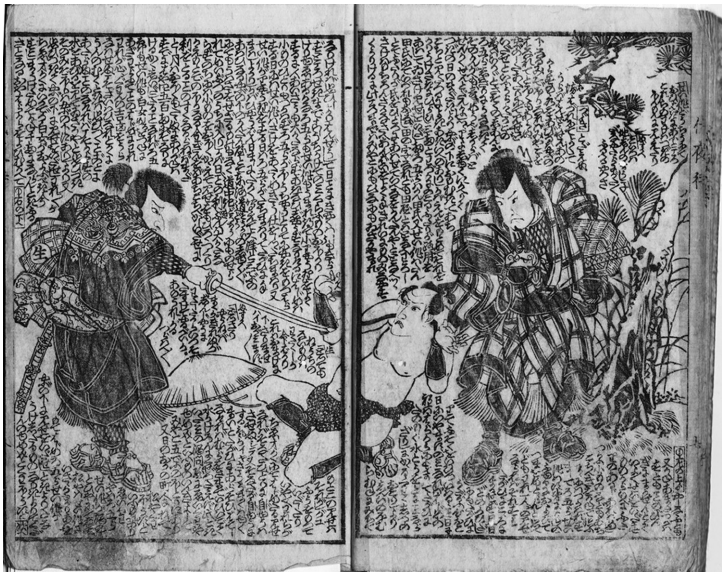
ろへ旅宿に暮らす旅人なれば、帰りを急ぎはいたさねど、今来た他国のわれ〳〵に留守をお頼みなさるゝとは、江戸の麻布じやなけれども気が知れかねてこまりますてや。

せいへぢきにお帰りなされますか、同行待つてゐようかのふ。

白へゆかねばならぬ用があつて、ちよと一ト走りいて来るさかひ、しばしのほどじや、留守しておくれ。枕もあしこにあるさかひ、寝ころんでござんせへ。

［六ウ―七オ］

つゞき帰りはべらんにといひつゝ、出る折戸口、忙はしげに走りゆくを、共に見おくる盧五郎も生作も只呆れ果て、さて無造作なる女かな、さしたるものなき家なりとも、はじめて来たるわれわれに留守を任せて、いづちへか出て行くことやはある。うたてや、質に取られしごとく、断りいはでは今さらに帰るにも帰りかたし。今日も半日あちこちと経巡りたることなれば、くたびれぬでもなきものを、しばしなりとも横ろびて茶代いらずに休息せん、さはとてやがて辺りなる枕二つを引寄せて、裳裾下ろして諸共につひとろ〳〵とまどろめば、時こそ移れ、既にはや七つ下がりになりしころ、二人はひとしく目をさまして、辺りを見るに、主人の女は出たるまゝにいまだ帰らず。日影もいたく傾きたるに、いつまでかかくてあるべき。頼みしことを占なひもせで、人の顔を見るとそのまゝ、留守を預けて日の暮るゝまで帰らぬは不思義也。かく気の知れぬ女主人に吊られてこゝに日を暮らし、明日まであらば思ひがけなき言ひ掛けをやせらるべき。うか〳〵としてゐるは要なし。思ふにあの白女とやらんを世の風聞にもの〳〵しくいふは由なき空事にて、何も得知らぬ女にこそ。とは知らずして占はせ、あたら銭を費して、われ〳〵が願ひの由をよく言はるれば良けれども、悪しと言はゞ心に掛ゝりて、かへつて事の妨げなるべし。とく〳〵旅宿へ帰らんとて、両人ンさらに談合しつゝ、そがまゝ庵を立ち出て、旅宿を指して帰るほどに、と見れば向ひの薮の下にいさゝかなる溝掘あり。南表に横日さしていと暖かげなればにや、一羽の烏下り立ちて、しきりに水を浴みけるを、盧五郎はるかに見わたして、生作あれを見給へかし。水に鳥を添ゆる時は酒といふ字になるにあらずや。われ〳〵が商売には酒屋などこそしかるべけれ。さればとてわづかなる元手で出す見世なれば、舛売りは仕入れ続かず、九尺ばかりの小見世にて居酒屋をせば、お釜返しに繁昌せんこと疑がひなしといふに、生作うち笑みて、そは奇妙なる占方なり。都の内には良き酒屋のあちこちに多ければ、行来つぎへ



［七ウ―八オ］

奴〳〵奴に八九こ豆腐とは、合はせて三十四文が酒を引かけろといふ瑞相だんべい、これでやう〳〵人心地がついた。

生〳〵から汁に一合はあなた様かナ。

〳〵ヲツト、から汁ならこゝだ〳〵。

生〳〵ハイ〳〵、只今あげます。

〳〵畜生め、お合ひをいたしませうと言ひたさうな面つきをしてゐるな。

〳〵どうだまだかの、こつちが先だぜ。

ろ〳〵今日は豪勢に忙しい日だ、モウ七つだにまだ昼飯を食ふ間がねへ、せい公、間違はぬやうにしやうぜ。

［七ウ―八オ］

つゞき途絶えぬ場はづれにて、よくして売らば繁昌せん。あの烏の水を浴びるは薮の下なる溝掘りなれば、都を離れて遠くもあらぬ薮の下あたりにて見世を出せといふ占方か。この義はいかゞと早速の思案に、盧五

郎しきりにうなつきて、その考へも奇妙也。しからばとせんかくせんと談合しつゝ、旅宿に帰りて、次の日のまだきより藪の下におもむきて、あちこちと見たつるに、よき空家のありしかば、縁を求めてそれを借り受け、先に拾ひし三両とわづかに残る二人が路用を合はして、居酒見世を出し、扨盧五郎は邯田氏、又生作は鄲田氏にて、いづれも同じ田の字なれども、田屋とは唱へわろしとて、二人が氏を一つに合はせて家名をかんたん屋と唱へつゝ、酒はもちろん肴さへ按配をよく手きれいに、物みな安く売りけるに、此頃までは都にも鄙にも居酒屋まれなりければ、思ひしより繁昌して、日ごとに客は引もきらず。所せきまで腰うち掛けて、飲み喰らふ者多かりけり。故あるかな、盧五郎も生作も生まれ得て小料理をよくするに、人愛想も大かたならず、商ひ上手なりけるに、はじめは小者ひとりも使はず、盧五郎が包丁取りて煮焼きをもつはらする日には、生作は酒を温め給仕をしつゝ、立ち回り、又、生作が料理をする日は盧五郎が立ち回りて、互ひに手廻し良かりしかば、評判日増しに高く聞えて、大津と三条の間なる藪の下のかんたん屋とて、東海道の宿〳〵にても噂をせざる者もなく、道中記にも載せられて、名物の内に入りしかば、日ごとの利ぶんは大かたならず、後には小者を多く抱えて、見世をも広く作り替え、元手の外なる金銀をばあちこちへ貸し出せしに、利をとることの少なからねば、まだ年月は多くも経ゝぬに、有り金は既にはや四五百両にぞなりにける。かくしいだしたることなれば、盧五郎も生作も白女を常に嘲笑ふて、ことの始めにわれわれが心ン願の吉凶を占なはせぬこそさいはひなれ、とかくに運の向く時は、思ひつくことごとに当たらぬことのなければこそ、烏の水を浴びるを見て居酒屋と思ひつき、その溝掘りは藪の下にありしより又思ひつきて、藪の下に見世を出せしわれ〳〵が知恵才覚に、いかでか白女が及ぶべき。今すこし儲けためて金千両にならん時、故郷なる親兄弟を呼び迎へて養ふとも、又金あまた遣はすとも、事の便宜にまかせんとて、いよ〳〵精を出すものから、家に二人の主人あれは、召し使ふ小者などもあちこちへ気をかねて思ふまゝには使はれず。まして盧五郎、

生作は、次第に金の増ゆるに及びて妻を娶らんと思へども、我一人ンの見世ならねば、それすら互ひに心にまかせず。且日ごとの買ひ出しにも、互ひに疑ふ心おこりて不足を言ひつ言はるゝこと、日に日にいやますのみなれば、はじめの程は兄弟にも増して互ひに頼もしく水と魚とにことならざりしに、かゝる確執の起こりしより、瞋恚の炎胸にみちて、元この見世はそれがしが工夫をもつて出したり。いや〳〵我らが知恵才覚にて始めたる見世なれば、そなたひとりに自由はさせぬ。シテ又そなたが自由にする気か。イヤさううまくは行くまいと、互ひに争そひ果てしなければ、村長まで言ひ出て水掛け論に口舌たえず。此とき伊丹の酒問屋に栄華屋夢介といふ者、隠居して都五条のほとりにあり。又日の岡の町人に根手松屋果報次といふ者あり。栄華屋は盧五郎、生作が酒の問屋にて、根手松屋は生作にいさゝか所縁あるをもて、はじめ盧五郎、生作が藪の下に見世を出せし時より店請したる者なりき。よりて件の夢介と果報次と次へ

〱生作、道中にて追剥に遭ふところ。これらの訳は次の本文に見えたり。

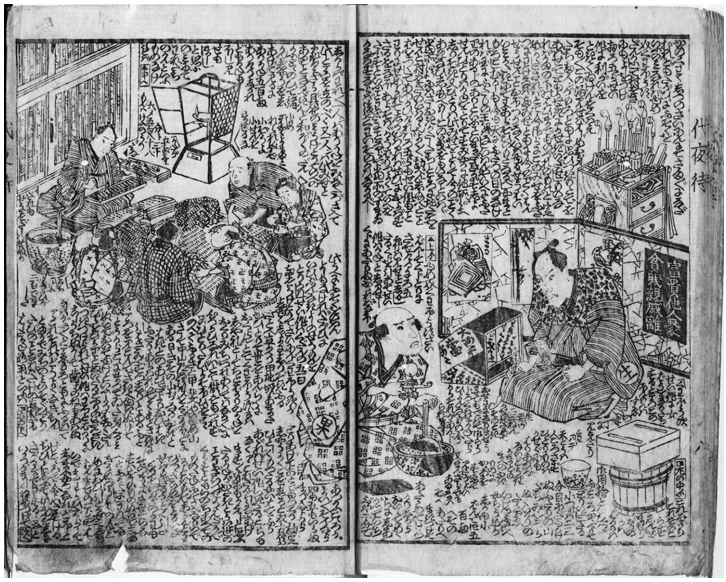
盗人〱こいつは地震の申し子だな、やたらにがた〳〵震へる奴さ。

生〱とつても値打のないものは、私が命ばかり。これはおまけに下さりませ。ハイ拝みます〳〵。

盗人〱どつさりやらねば幕が切れぬが、尋常に渡したからいつそ助けてやるべいか。あの嬉しがる面はへ〳〵。

［八ウ―九オ］

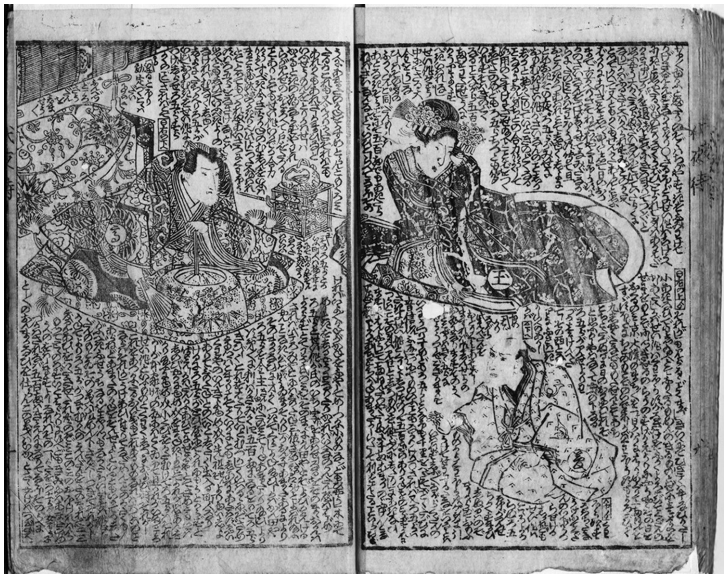
かの確執の裁人にてさま〴〵に宥むれども、たがひに不足をいふのみなれば、夢介、果報次、談合して村長にも由を告げ、扨、盧五郎、生作に利害を説きて意見を加え、そも〳〵この酒見世ははじめ御身たち両人ンがもろともに思ひ付き、元手を合はせて共稼ぎに稼ぎ出せしものなれば、釜の下の灰までもいずれのものと定めかたし。され



［ハウ一九オ］

ばとて今さらにこの見世を二つに分けなば、両見世ともに今のごとく繁昌せんことおぼつかなく、いはゆる商売忌敵にて、又争そひの元なるべし。大和唐土、昔も今も、天に二つの日のなければ、国に二人の王はなし。いはんや家に二人の主人のありといふこと、いまだ聞かず。しよせん一人は金を取りてすみやかに他所へ退き、又ひとりは此見世を取りて今のごとく商ひし給へ。もしこの義をも否といはゞ、当所には差し置きかたし。たちところに地立てをせんと村長のいはるゝなり。よく〳〵勘弁し給へと言葉を尽くしてあつかひければ、盧五郎も生作もことわりに責められて、しかいはるれば是非に及ばず。さるをなほ争はゞ、勾張り強くて家を倒すといふことわざに異ならで、当所の住まゐかなはずならば、後悔その甲斐なかるべし。しからばわれ〳〵一人ンは有金をみな携さへて此ところを立退くべく、又一人ンは此見世と家具雑具をのみ受け取りて、家の主人となるべき也と、和睦の談合と、のひて、諸勘定をしあげて見るに、あり金五

百両ありけり。しかれども金も欲し、見世も欲しと思ふのみにて、我立ち退かんといふ者なければ、夢介、果報次裁判して鬮とりにさせけるに、盧五郎は見世としるしたる鬮を引あて、生作は金としるせし鬮に当たりぬ。かゝればなほ此上に不足をいはん由もなければ、互ひに言ひ分なき由の証文を取り交はし、生作は件の五百両を受取りて裁人果報次が宿所にしりぞき、故郷へ立帰り、田地あまた買ひとりて世を安楽に送らんとて、果報次には謝礼としてちとばかりの金を贈り、道連れありてはなか〳〵に心遣ひなればとて、供をも連れず只ひとり、旅よそほひを整のへて、故郷甲斐の夢山さして中山道を下るほどに、ある日、木曾の山路なる荻と萩との間より追ひ剥ぎ二人あらはれ出て、後先に引はさみ、ずつしりとある懐を見こんで先へ行き抜けて、疾うからこゝに待つてゐた。身くるみ脱いで置いてゆけと、いふより早くだんびらをひらりと抜いたる氷のきつ先突きつけられて、生作はわつとばかりに腰うち抜かして、歯の根も合はぬ身はがた〳〵と声もろともに震はして、アゝこれそれは胴欲な、木賃泊まりで路のみ急ぐひとり旅のことなれば、丈の知れたるはした金、路用といふはこればかり。これを残らず進ぜませう、身の皮ばかりは御用捨と、いひつゝ懐かゝぐりて取り出したる小粒は二三分、目にだも掛けぬ二人の山だち、身を貫ぬく怒りの高声、いけつふてへ野郎めが、しかも小判で四五百両、臍のあたりへ巻き付けて暖めてけつかりながら、おいらを盲にしあがつて、一分や二分で扱ふ心か。よい〳〵、そんなら四も五もいらぬ、まづ命から取り上げて後でゆつくり勘定しやう、覚悟をしろと双方ひとしく持つたる刃を振りあぐれば、生作生きたる心地もなくて、アゝこれ短気な、あげます〳〵、身にも代えじと思ふたる金が敵と浮世のことわざ、一生裸で暮らすとも命あつての物種にて、又なり出る時もぞあらんと、詫びつゝ財布を取り出せば、もぎるがごとく引たくり、その身の皮もそのまゝに着せていなすは惜しいもの、脱いでしまへと踏み倒し、詫びても聞かぬ剛気の手込めに、帯引とかせて襦袢まで残らず剥いで高笑ひ、ばらしてしまふ奴なれど、仏心で命は助ける、慈悲と思ふて此恩を死に



［九ウ―十オ］

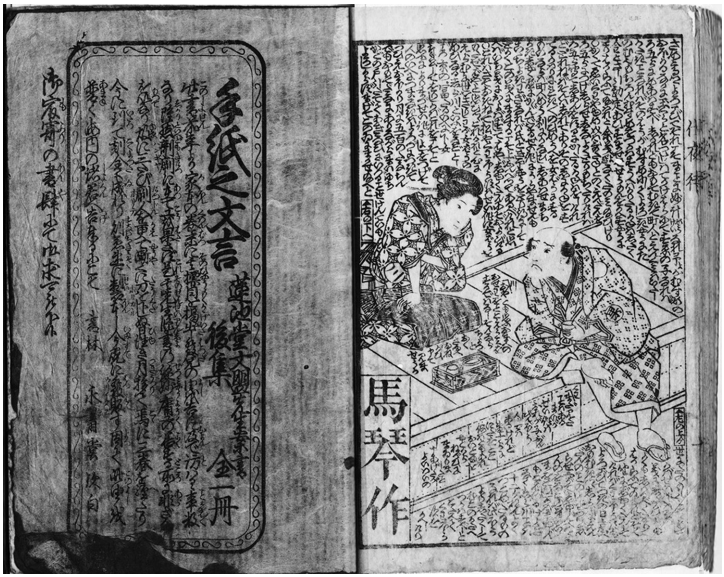
さがるまで忘るなと、いかつがましくねめつけて次へ
へ果報次、生作に女房を仲立ちするところ。この本
文は末の半丁に見えたり。
果へハテ天道は人殺さず、ひとり者は稼ぐにも張り
合ひがない道理。竈の前の置物に嬶を据ゑて見たが
よい、又まんざらでもあるまいぞへ。
生へモウ二三年稼ぎ溜めて、その時御世話になりま
せう。子でもできて御覧じろ。食はせかねたらひよ
んなもの。今からそれが案じられます。
小者へ早く読まぬと寝られぬぞ。小僧よ、小銭をま
ぜるな〳〵。
へ金が五両壹分ト三十六〆五百八十八文は今日の売
りだな。誰も銭を出しはせぬか。
でつちへ今日小遣いが二百でました。

［九ウ―十オ］
サア〳〵行かふと二人の賊は茅芒を踏みわけて、影
さへ見えずなりにけり。

○さる程に生作は、故郷へ錦と思ふたる金のこりなく奪ひとられて、身はあか裸になりしかば、進退既に極まりて、つくづくと思ふやう、大かたならぬ災難にて此ていたらくになりしかば、故郷へは帰られず。都の方へ取つてかへして、又ともかくもせん方あらんと思ふばかりに、乞食をしつつ辛うして日の岡まで立帰り、さて根手松屋果報次にかの災難を告げ知らせて、涙ながらに頼みしかば、果報次聞て且おどろきかつ憐れみて宿所に止め置き、その夜、盧五郎が見世に赴き、生作が災難のことしかじかと物かたりして、いと気の毒なることなるに、御身ちとの合力して路用の助けにさせ給へと言葉を尽くして頼めども、盧五郎ちつとも聞入れず。そは気の毒なることながら、五百両を渡せし上に合力すべきいはれなし。生作が道中にてさる大金を失なひしは、その身の不覚、言語同断。もしくは後なき空事にて、五百両でも飽き足らねば災難なンど、いひこしらへて、なほその上にあまたの金を掠め取らんともくろみたるか。これも又はかりかたし。それはともあれかくもあれ、さし構ひなしといふ証文を取り交はせしは、かゝる時の為ならずや。我らが見世の衰へて戸を立つることありとても、生作いかでか合力すべき。今さら金の無心をいふは、誠に沙汰の限り也。此よし伝へ給はれとて、とつてもつかれぬ挨拶に、果報次は盧五郎を情けなしとは思へども、強ひていふべき由のなければ、むなしく宿所に立ち返り、盧五郎がいひし趣を生作に告げ知らせ、盧五郎すらかくのごとし。さればとてそれがしも見らるゝごとく貧しき家にて、久しくは養ひかたし。小商ひでもし給へとて、古りたる木綿の着る物と銭壹貫目を貸しあたへしかば、生作は果報次がなさけを深く喜びて、くだんの銭を元手にしつゝ、煙管の羅宇のすげ替え売りにやうやくその日を送るのみ。京大津のまち〳〵を一チ日かはりに走り巡りて一両年を過ぐす程に、ちとの元手の出来しかば、果報次も喜びて九尺店でも持たせんとてあちこちと尋ぬるに、日の岡にはこれぞと思ふ貸し家はなくて、藪の下なる盧五郎が見世よりわづか壹間へだてしその西隣りに、ふさはしき貸家のありしかば、果報次すなはち店請にて、くだんの家に移らせけ

る。しかれども生作は心よからぬ盧五郎が見世ちかく住まひしぬるは望ましからず思ふものから、果報次が身に引うけて世話する店を否とはいはれず。しぶ〳〵ながら件の家に移り住めども、盧五郎とはなほも千里を隔てしごとく、互ひに音信不通ッにて、ものいふこともなかりけり。

○されば又、盧五郎は先に生作と確執積もりて五百両の有金をのこらず彼に遣はして、その身は見世としろものを徳分にしたりしに、商ひます〳〵繁昌して、一両年経つや経ゝぬに千両あまりの分限となりぬ。これによりあちこちへ金あまた貸し出して利をはたることいらひどければ、いよ〳〵金が金を増やして、召し使ふ小者なンども拍子木にて飯時を知るやうになりたり。かゝれば家名のかんたん屋ははじめ盧五郎と生作が氏の一字を合はせしなるを、そのまゝ置かんは良からずとて、わが氏のみをそのまゝに、かん田やとぞ呼び変えける。されば此ころ都には、歌種三位覚高卿と呼ばれ給ふやんことなき公卿ぬまそかりしが、御子あまたあるによりその賄ひに才覚尽きて、暮らしかね給ひしかば、かん田屋盧五郎を金主に頼みて、金あまた借り給ひしより、次第〳〵に利はかさみて四五百両になるをもて、盧五郎きびしくこれをはたりて、いと難しくいはるゝにぞ。覚高卿は困り果てて、いかにとも思案にあたはず。栄華屋の隠居夢介は先祖より由緒ありて、歌種殿へいと親しく出入る町人なりけるに、盧五郎が問屋にて彼にも疎からずと聞えしかは、談合相手にせばやとて、覚高卿はしのびやかに夢介を招き寄せて、彼が思案を借り給ふに、夢介、小首をかたむけて、盧五郎はそれがしが本家の為には得意にて、且彼がいぬる頃、生作といふ者と確執に及びし時、それがしこれを扱ふたる恩義もこれある者なれは、大抵のことならばそれがし請け合ひ奉りて宥めんことの難くもあらねど、あまたの金を損せよといふとも、いかでか従ふべき。不承知なるを知りつゝも仲立ちはいたすは破談の基、その義は御免下さるべし。つきてそれがし、かねてより盧五郎が妻迎への縁談を頼まれて、二三度見合ひをいたさせたれ共、望み好みの多ければ今もつて整はず。いとはゞかりに



［十ウー上冊裏見返し］

候へども、君にはあまた姫上のをはします由なれば、その一ト方を盧五郎が女房に遣はされなば、五百両は奇縁になりて、なほその上に年〳〵の御賄ひを仕らん。この義はいかゞとさゝやけば［つぎへ］

夢へはゞかりながら此縁談をお取りくみあそばしまするれば、御身上の御為になります。その上、男ぶりは菊五郎に正写しでござります。

玉へその盧五郎とかいふ町人は、梅幸に似てゐるかや、そんなら行きたうなつたはいのふ。

高へいやるとほり勘定づく。こゝは大事の分別どころ、相談をしませう〳〵。

［十ウ］

覚高卿よろこびて、それこそまことに妙計なれ、予が娘の多かる中に玉枕と名つけしは、妾腹にて末の子なれば、盧五郎に娶すべし。しかれども表向きて町人と縁組はいたしかたきことなれば、その方が娘にしてよろしきやうに頼む也。もちろん娘を遣はす上は、

借りたる金は支度金と差し引勘定あひすませて、証文を返すやうに取り計らふて給はれと、余義なく頼み給ひけり。

○かくて栄華屋夢介は、歌種殿、縁談を盧五郎に告げ知らせ、品よく取り持ちたりければ、盧五郎聞て思案をするに、貸したる金は惜しけれど、取れねば損は知れてあり。その死金を棄てる代はりに、歴〳〵の姫上を女房にするものならば、町人冥利に叶ひししあはせ。問近き借屋にかゞんでをる生作に羨ませんも心地よきわざなれば、氏と縹緻を取り得にして、とかくこの義に任するこそ上分別であるべけれと思へば、一義に及ばずしてはや熟談にぞ及びける。

○これはさておき根手松屋果報次は、生作に女房を持たせばやと思ひつゝ、これかれと心に選むに、世を去りし我が女房の姪なる白川といふ女子、としごろ京の富たる家に下女奉公してをりしかば、これをこそと思ふにより、まづ生作に由を告げて、人の家に妻なきは万につきて費え多かり。月に五百の店賃でも表店にありながら、毎日かごの戸引たてて商ひに出ること、世間体も良ろしからず。まげてこの意に任せ給へと世に頼もしくすゝめしかば、生作はその義に従ひ、ともかくもしかるべく取り計らふて給はれと、即坐に熟談してければ、果報次も喜びて、次の日、京へおもむきつゝ、白川に縁談のことの由をつげ知らせ、やがて主人へ件の女子の身の暇を乞ひしかば、主人も拒めるけしきなく、白川ことは十二ヶ年よく勤めたる者なれば、此方より支度して聟の方へ遣はすべしと答へて、果報次を帰しけり。

果〳〵まだ見たことはあるまいが、生作は俺が子分、貧乏人ンではあるけれど、団十郎に似た男、何はともあれ、お暇を宿から願ひにまゐりましたと申あげたが良いはいの。

川〳〵親とも思ふおまへの御世話、男えらみをするではなし、そんならちよつと奥様へお願ひ申て見ませうか。

（付　記）

画像はすべて専修大学図書館向井信夫文庫蔵本を使用しています。ただし画像撮影は、いまだ本書が向井家にあった二十年近く前に行っています。本書を翻刻させてくださるよう先生にお願いしてからの年月の長さに、我ながら長嘆するばかりです。本作の資料掲載を御許可いただいた専修大学図書館に感謝申し上げます。また本文の判読に際して、国文学研究資料館「所蔵機関との連携による日本古典籍デジタル画像データベース」によってネット上で公開されている、九州大学文学部所蔵『代夜待白女辻）占』の全画像を参照させていただきました。記して御礼申し上げます。

なお、本稿は平成三十年度専修大学中期研究員の研究成果の一部です。

馬琴作